

濟暹における密教行位説

田 戸 大 智

一 はじめに

日本密教の思想的展開が、空海（七七四～八三五）を基點としてゐることは贅言を要しない。しかしながら、その言説には様々な教義上の問題點を派生させる要素が潜在しているのであり、それらを各自の視座から體系づけることが後の東密の學匠にとって緊要な課題であつたと考えられる。

東密の行位説は、諸論義書等で整理が試みられている。それは、即身成佛や機根という觀點と併せて論述され、「初地即極」という題目が示す如く、初地を極めて重視する解釋が基本となっている。但し、このような教説が導き出されるまでには、やはり東台兩密の諸先學による試行錯誤があつたと捉

濟暹における密教行位説（田戸）

えるのが必然的であり、研鑽の蓄積によって漸次成立していったものと理解すべきであらう。⁽¹⁾そこで今、注目したいのは、初期の東密を代表する學匠の一人である濟暹（一〇二五～一一一五）が、どのように行位を把握していたかということである。

濟暹は、空海以降、教學の擴充に先鞭を付けた學匠として重要であるが、また一方で、台密の教學、特に安然（八四一～八八九）、一説九一五没⁽²⁾との關わりが濃厚であることも特徴の一つである。そして實は、濟暹が行位について言及する場合でも、同様のことが看取されるのである。本稿では、如上の點に着目することで、濟暹が安然の教説を勘考しつつ、どの様な行位説を構築していたのか檢證していくことに

したい。

二 濟運の基本的見解

先ず濟運の行位説を考究するに當たり、東密において最も代表的な見解である初地即極説を通覽しておかなければならない。なぜなら、その説との差異を明確にすることによって、濟運の特色が浮き彫りになると考えられるからである。

そもそも、密教諸經論には様々な行位が説示され、複雑な様相を呈している。とはいえ、基本的には初地を重んじる文證が多く見出されるのであり、例えば『大日經義釋』卷二『疏』卷二の「然此經宗、從_二初地_一得_二即入_二金剛寶藏_一」や、『金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』の「若有_二衆生_一遇_二此教_一、晝夜四時精進修、現世證得歡喜地、後十六生成_二正覺_一」等の記述からその一端を窺い知ることができる。

東密では、これら諸文獻に散見される初地を基調とした説を主軸としつつ、初地即極という教義を確立させていくのである。但し、この教義が直ちに空海の思想から抽出できるものでないことには留意しなければならない。ともあれ、その大要については、印融（一四三五〜一五一九）が『杣保隱遁鈔』卷一で、次の如く論じていることから明瞭に了解される

であろう。

凡_レ自宗_一初地_ハ自性法身之内證、本初不生_一之心地_ニ候間、於_二此位_一自證可_二圓滿_一覺候。其上自宗之意、異_二常途地_一遷登_二十地_一、被_二立_一位_ニ平_一等_二十地_一候。此名_二無高下_一十地_ニ號_一不思議_二十_一候間、此中初地自證圓極位ナルヘウ候。……自宗_一十地佛果_ニ心地_一開立候間、初地自證_一内證、二地以上約_二化他_一候。

すなわち、初地が自證の極位であるということが肝要なのであり、二地以上は化他に約する位と位置づけられるのである。そして、『祕藏記』の「是密教所謂橫義。初地與_二十地_一無_二高下_一故_一」の記述を引據し、初地と十地が横平等であることが論證されている。このことによって、十地中に段階的な地位を指定することが不要となるのであり、結果としてあらゆる功德を初地に收斂させる教説へと歸着するのである。

ところで、『杣保隱遁鈔』卷一には、この初地即極説を機根と關連づけて論及している箇所も見られるので、以下参考までに提示しておきたい。

又於_二南山學者相傳_一、道範、頓・漸・超_一三機共於_二初地_一自證圓極、二地以上次位約_二化他_一行果_ニ法性_一、頓機_一初地即極、漸機_一十地次第漸_ニ修行_一至_二第十一_一地_ニ成_二正覺_一、

超機自⁽⁸⁾第二地超⁽⁸⁾第八地⁽⁸⁾也⁽⁸⁾。

ここに取上げられているのは、道範（一一七八〜一二五二）⁽⁹⁾と法性（？〜一二四五）の二義である。兩者の主張において、道範が頓機・漸機・超機の三類全てに初地即極を認めているのに對し、法性は頓機のみに限定しているところが大きな相違であると言えよう。就中、道範は二地以上の位を化他と捉えているのであり、三類の機根を初地即極説の立場から止揚しているという意味で注目される。また、この義を理解する上で、靜遍（一一六六〜一二二四）の講述を道範自身が筆録した『辯顯密二教論手鏡鈔』卷上之末における、次の如き記述も有益な示唆を與えてくれる。

問。於此眞言機有大・小二機、頓・漸・超不同見。其分別如何。

答。眞言教成佛者、一切皆直修・眞滿・頓極・頓證即身成佛也。仍初地以後十六生即無大・小・頓・漸不同。皆十六三昧同時頓證。而爲果後方便示現十六分漸次顯得之果。是故、自證地上皆頓證直滿本有十地無垢無惑也。是則初地初發心時、即圓極萬德普門果故。其十地者即本有無垢也。即初地同時證得之萬德也。依之、地上大・小二機・頓・漸・超者、其實行唯是頓・大・漸・濟遲における密教行位説（田戸）

少唯教門。是則以果後施設道前⁽¹⁰⁾也。

要するに、初地の段階で十地の功德を全て圓滿するという密教の即身成佛の秀逸性に依れば、初地以降において機根の差異は存在せず、全てが頓機・大機と看做されるのである。そこで問題となるのは、初地以降の十六生（十六大菩薩生）をどう解釋するかであるが、それが果後の方便（化他）として十六分の果を漸次に示現すると説明されていることから、本有無垢の十地（平等の十地）と對應關係にあることが推測されよう。

以上の如く、濟遲以降に展開する東密教學では、十地を建立しながらも初地を尊重することが通例であるため、それ以前の位である十信・三賢（十住・十行・十廻向）等が問題視されることは少ない。つまり、眞言行者にとって十地こそが最も肝要な位なのである。⁽¹²⁾ そのことは、有快（一三四五〜一四一六）が『大日經疏抄』（有快抄）卷七で「付之、大日經宗意、以十地爲性相、可定眞言行者地位、云一義在之。其故、經文正說地位事、十地說相分明也。三劫・六無畏、所寄齊爲面說之。隨而經說十地次第此生滿足、疏釋能於此生滿足地波羅蜜。就之、立十地爲性相事有數由。一、金剛頂十六生、當經十地、其分齊同故也。兩部建

立、且雖各別也、地位分齊可同。次、地前三劫顯教分域、初地以上正眞言內證位也。⁽¹³⁾と述べていることから傍證されるであろう。すなわち、有快は、『大日經』所説の十地を眞言行者の行位として特に取り上げる義について、十地が十六生（十六大菩薩生）と同工異曲であり、且つ初地以上が密教の内證位であるからという二つの理由から容認しているのである。⁽¹⁴⁾なお、このような解釋を成立させる基底に、『大日經』卷一の「十地次第此生滿足。」⁽¹⁵⁾という説があることを看過してはならない。

さて、それでは、上記のことを勘案しながら、濟暹の行位説を逐次検討していくことにしたい。先ず注意すべきなのは、濟暹が『五相成身義問答抄』で「問。眞言教法中、不建立十信・三賢・十地義者、有何咎耶。答。有違佛說咎。問。其意云何。答。……」⁽¹⁶⁾と述べる如く、密教では十地のみならず十信・三賢も建立することを立言していることである。そこで、濟暹のこうした主張が、何を根據としているのか尋究されなければならないが、それは以下に示す『兩部曼荼羅對辨抄』卷下の記述から知ることができる。

問。於兩部教門、建立修行眞言門、菩薩之地位階降義上耶。答。立爾。

問。其文證云何。

答。仁王經儀軌及良賁仁王經疏云、三藏所持金剛頂瑜伽經明四種地。一解行地、謂三十心也。二普賢地、十地也。三大普賢地、謂等覺也。四普照曜地、謂妙覺也。^文又金剛智三藏用心次第義云、即證解脫一切障三昧。但此三昧者、名爲地前三賢。依此漸遍周法界、如法所證、名爲初地。^文^{已上金剛界菩薩地位也。}又無畏三藏慈氏儀軌云、初作如是悉地、即證五地・八地・已來眞言菩薩。^文又云、七金山間甘露香水等海、其中諸聖而居。又諸山中皆有諸賢聖。地前四十心賢聖、十信・十住・十廻向・十行等。^文又大日經疏第九云、今此祕密藏中、今此菩薩律儀、亦復如是。雖復最初發心乃至四十二地階次不同、然一時普遍法界、發起無作善根。以此義故、名爲祕密藏中無作功德也。^文^{已上胎藏界中地位也。}⁽¹⁷⁾

この主旨は、密教の菩薩が修すべき行位を解説することであり、證憑とすべき文獻として『仁王經儀軌』（『仁王護國般若波羅蜜多經陀羅尼念誦儀軌』⁽¹⁸⁾）及び良賁の『仁王經疏』（『仁王護國般若波羅蜜多經疏』⁽¹⁹⁾）卷下三、『無畏三藏禪要』（『慈氏儀軌』（『慈氏菩薩略修慈識念誦法』⁽²⁰⁾）卷下、『大日經疏』卷九（『義釋』⁽²²⁾）卷六）等が列記されている。これら引用文獻の

内容から、濟暹が密教の行位を四十二位、或いは五十二位の何れかに規定しようとしていたことは容易に推察されるであろう。但し、所見が述べられていないので、どちらを正意とするのかここからは読み取れない。このことを明記しているのが、次に引用する『金剛頂發菩提心論私抄』卷四の文である。

論、若常見者、則入菩薩初地者、是初也。

問。此初地者、是爲何教初地耶。

答。菩提心義三云、住心品云、十地此生滿足。及具緣品等義釋云、眞言門菩薩入三初地、坐三百葉臺、百佛世界作佛利生。是約別教地位明眞言門菩薩之地位。^文

……故彌勒儀軌云、初作如是悉地、即證五地・八地・已來眞言菩薩。^文 又云、七金山間甘露香水等海、其中諸聖而居。又諸山中皆有諸賢聖。地前四十心賢聖、十信・十住・十廻向・十行等。^文 今私云、若借彼別教教道門之假施設賢聖衆者、以下彼他宗家教所建立菩薩衆者、何令居在眞言門曼荼羅中哉。即知、於眞言門中直實有五十二位也。又大疏九云、今此祕密藏中、今此菩薩律儀、亦復如是。雖復最初發心乃至四十二地階次不同、然一時普遍法界、發起無作善根。以此義故、名濟暹における密教行位說（田戸）

爲祕密藏中無作功德也。^文 是說既偏局眞言一門直往菩薩之位也。⁽²³⁾……

ここで問題とされているのは、『菩提心論』の「若常見者、則入菩薩初地。」という文の初地をどう位置づけるかということである。このことについて、濟暹は安然の『菩提心義抄』卷二を引用し、それが初地を天台別教の地位に擬したものとして看做しているとして斥けている。そして、前出の『兩部曼荼羅對辨抄』所引と同様の出處により、眞言門では直ちに五十二位があることを言明するのである。⁽²⁵⁾

このように、密教の行位を五十二位と捉える解釋が、後に確立する初地即極のような行位說へ至る過程に存立するものであることは確かである。とはいえ、活用される文獻が多様であり、且つそれぞれが獨自性を有しているので、濟暹がそれらを充分咀嚼した上で如上の説を打ち立てたかどうかは疑問である。いずれにせよ、過渡期における台密を參照した說として押さえておく必要があると思われる。

ところで、濟暹の著作類には、この五十二位を様々に充用しているところが散見される。それは、『大日經住心品疏私記』卷十五⁽²⁷⁾で、十六大菩薩にこの行位を達意的に配釋していることから認められよう。中でも、注目すべきなのは、金

剛頂經系の觀法である五相成身觀を説明するために、この行位を積極的に活用しているということである。そこには、まさに台密の影響が垣間見られ、極めて獨特な議論が展開されているのである。このことについては、節を改めて考察することにした。

三 五相成身觀と行位をめぐる問題

五相成身觀とは、自らの本有菩提心を開顯し、五佛の功德を圓滿させて成道に至る五段階の瑜伽觀法のことであり、金剛頂經系の代表的觀法として重視されている。その内容は、既に坂野榮範氏の詳細な研究によって明らかにされ、五相成身觀の觀法・眞言・印契が諸經軌によって多種多様であり、十分組織化されていなかったことが指摘されている。²⁸⁾

五相成身觀の名稱については、實質的にこの觀法を説きつても一々の名が判然としない經軌が多く、『金剛頂經瑜伽十八會指歸』の「五相者、所謂通達本心、修菩提心、成金剛心、證金剛身、佛身圓滿。此則五智通達。」という註記や、『菩提心論』の「次明五相成身二種、一是通達心、二是菩提心、三是金剛心、四是金剛身、五是證無上菩提⁽³⁰⁾獲金剛堅固身也。然此五相具備方成二本尊身也。」という記述を参照して、諸經

軌が説く五相成身觀にそれぞれ配釋するという方法が取られている。本稿でも、諸先學に則り、最も一般的な、①通達菩提心、②修菩提心、③成金剛心、④證金剛身、⑤佛身圓滿という呼稱を用いることにしたい。

さて、この觀法について、空海がしばしば論及していることは注意すべきであるが、その大部分は經軌からの引用であり、具體的な見解を見出すことはできない。その詳細を評釋しているものとして指を屈するべきは、覺超（九六〇～一〇三四）の『五相成身私記』と濟運の『五相成身義問答抄』の二本である。⁽³¹⁾就中、濟運はこの著作以外でも五相成身觀に關する自説を開陳しているのであり、その一部こそが前節で觸れた行位（五十二位）との關連から五相成身觀を把握しようとしているところなのである。

そこで以下、基本資料として『五相成身義問答抄』一卷・『金剛頂發菩提心論私抄』四卷（但し、二卷・三卷欠）・『金剛界大儀軌肝心祕訣抄』三卷の三本を中心に取り上げて、濟運の教説を検證していくことにしたい。先ず、その要諦をよく纏めているという意味で、次に示す『金剛界大儀軌肝心祕訣抄』巻中の文は頗る重要である。

問。凡於五相成身有幾義耶。

答。略有二途義也。

問。其二義有様如何。

答。一者、五相成身、是皆作「五相」在「佛果位」也。故十八會指歸云、五相所謂通達本心、修菩提心、成金剛心、證金剛身、佛身圓滿。此則五智通達也。

安公云、私云、通達本心即是通達法界體性智。餘四次以通達四智。今云、是從本垂迹義。

又寶鑰云、五相五智法界體也。云。已上皆在佛果義也。二者、五相成身、是行因至果義也。謂五相之中、前四相是在「因位」。後一相是唯在「果位」也。菩提心論及大儀軌、并弘法大師、慈覺大師等諸師說也。故金剛頂經疏云、五相中初四相是因、後一相是果。云。而安然師說意、是五相中初三相是在「因位」中。後二相是在「果位」云。此意云、第二行菩提心者、是三賢行及十地位也。第三成金剛心、是等覺位。第四證金剛身、是當「妙覺金剛無間道位」云也。第五證本尊身者、出從「自證法身」、更示下出「現於本所行門」、而利益諸衆生界。上故隨「所被機」名「本尊」云也。是當「應化等流身」也。32

ここにおいて先ず着目すべきは、濟運が五相成身觀に二説あることを明言しているという點である。この二説の中、主

題となる五相成身觀と行位の關係が論じられているのは、第二説である。とはいえ、第一説についても若干の説明を加え

濟運における密教行位説（田戸）

ておくべきであろう。すなわち、その説とは、五相成身觀が全て佛果位にあると看做すものであり、その根據として前述の『十八會指歸』、空海の『祕藏寶鑰』卷下、33更には「安公云」として安然の『菩提心義抄』卷四の文が註記という形で引證されている。このような解釋が可能となるのは、五相成身觀を密教の五智（法界體性智・大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智）に當て嵌めようとしているからであり、特に安然の「私云、通達本心即是通達法界體性智。餘四次以達「四智」。」という記述に依據するところが大きいと思われる。因みに、安然は、この『菩提心義抄』卷四で『尊勝佛頂脩瑜伽軌儀』卷上の「五智品」35を基軸として、五相成身觀と五智の具體的な對應關係についても言及している。そして、その所見は、濟運を含む東密の學匠にも少なからず影響を及ぼしているのである。このように、五相成身觀と五智の關連性をめぐっても、實は留意すべき課題が多く存在するのであるが、今はこの程度の概説で止めておきたい。36

それでは、いよいよ本題である第二説について考察を進めていくことにする。ここでの眼目は、主に圓仁（七九四～八六四）の『金剛頂經疏』卷一の文に準據して、五相成身觀を行因至果の義と位置づけることにあり、前の四相（①通達菩

提心・②修菩提心・③成金剛心・④證金剛身を因位、最後の⑤佛身圓滿を果位と把握するものである。となれば、⑤佛身圓滿が妙覺となるのは容易に推察されよう。但し、注意すべきは、さらに「安然師說意」として、前の三相を因位、後の二相を果位とする異説も取り上げていることである。それによれば、②修菩提心に三賢・十地、③成金剛心に等覺、④證金剛身に妙覺、⑤佛身圓滿に應化等流身をそれぞれ配釋させているのであり、先の見解と照合させると、妙覺の定位が相違する等、少しばかり徑庭があることが看取されるのである。

上記の如く、濟暹が圓仁や安然の各説を參考としつつ、五相成身觀に行位を充當させていることは注目される。そもそも、濟暹は『五相成身義問答抄』の劈頭で、一問。以五相成身而相配於眞言門之發信位・比觀修行位・分證得位・因滿位・果滿位之五種階級義有乎。答。有也。」と問答し、五相成身觀に發信位・比觀修行位・分證得位・因滿位・果滿位の五段階があることを明言している。この五段階は、恐らく十信・三賢・十地・等覺・妙覺の五十二位を念頭に置いて解釋したものと考えられ、それらを五相成身觀に如何に配當するかが大きな問題となるのである。

ところで、前述した行因至果の二説は、『五相成身義問答抄』及び『金剛頂發菩提心論私抄』で詳論されているので、更に兩書の記述を對照させながら吟味していくことにしたい。先ず、議論の都合上、『金剛界大儀軌肝心祕訣抄』で「安然師說意」として俎上に載せられていた説における、五相成身觀と行位の對比（以下、A説）を尋求してみると、以下の如く記されている。

①通達菩提心

・『五相成身義問答抄』

且先安公菩提心義第一明五相成身之中、明第一通達心處文（卷四、大正七五・五二九頁上）云、謂本淨九識是所通達心。染穢九識是能通達心。心地觀經（卷八、大正三・三八頁下）云、自覺悟心有其四種。凡夫一心、一者、眼識乃至意識同緣自境一名自悟心。二者、離於五根心・心所法和合緣境名自悟心。釋云、初心六識、後心七・八・九識。已文今喻曰、此即以第一能通達心之一分名爲初發信位意也。又已云染穢九識是能通達心、及云凡夫一心故、此即約前六識而明發信心位行相也。此位人是不三賢、亦不十聖。故云凡夫也。……此於凡夫位不能發菩提心故也。³⁹

・『金剛頂發菩提心論私抄』

第一通達心攝_二性得普賢大菩提心及修得一分之普賢大菩提心之心也。⁴⁰⁾

②修菩提心

・『五相成身義問答抄』

又菩提心義中明_二第二菩提心相_一處文(卷一、大正七五・四六八頁下)云、於_二性得菩提心_一發_二修得菩提心_一、名_二菩提心_一也。⁴¹⁾又此菩提心義(卷四、大正七五・五三二頁上中)引_二用用心次第_一、明_二所真言門菩薩三賢・十聖所_一修證_二菩提心行相也_一。……故知、此_二第一菩提心中以_二三賢・十地_一而配_二第二菩提心_一也。⁴¹⁾

・『金剛頂發菩提心論私抄』

第二_一菩提心攝_二三賢・十聖之修得菩提心_一也。⁴²⁾
義如上引用心次第文。

③成金剛心

・『五相成身義問答抄』

又此提心義明_二第三金剛心_一文(卷一、大正七五・四六八頁下)云、爲_レ欲_二加_二持此菩提心_一能令_二堅固猶如_二金剛_一。於_二心月輪_一令_レ觀_二金剛故、名_二金剛心_一也。⁴³⁾喻曰、此中雖_レ無以_二金剛心_一顯然配_二等覺位_一之文相、而其理已以顯然也。……故知、中間_二第三金剛心_一是定當_二等覺無閒道_一也。⁴³⁾

濟暹における密教行位説(田戸)

・『金剛頂發菩提心論私抄』

第三_一金剛心攝_二金剛無閒道_一也。是因位最後心也。殘一品無明障_二佛果菩提心_一之惑染、將_二斷盡_一時智也。是_二等覺位_一也。⁴⁴⁾

④證金剛身・⑤佛身圓滿

・『五相成身義問答抄』

又菩提心義明_二第四金剛身及第四五本尊身_一文(卷一、大正七五・四六八頁下)云、以_二金剛身_一爲_二本尊身_一名_二無上菩提_一也。⁴⁵⁾喻曰、第四身爲_二自證_一故名_二金剛身_一。是大日身也。第五身即爲_二成所作智_一。是即爲_二化他_一成_二法界等流身_一名曰_二證本尊身_一也。⁴⁵⁾

・『金剛頂發菩提心論私抄』

第四_一金剛身攝_二金剛解脫道_一。正是佛果最初心也。是妙覺智也。故出生義(大正一八・二九七頁下)云、及_二乎大種性人法緣已熟、三祕密教說時方至、遂却住_二自受用身_一、據_二色究竟天宮_一、入_二不空王三昧_一、普集_二諸聖賢_一、創_二地位之漸階_一、開等_二妙之頓旨_一。⁴⁶⁾此中所_レ言之等者、是等覺金剛無閒道也。即金剛心。妙者、妙覺金剛解脫道也。即金剛身也。故菩提心第一云、以_二金剛身_一爲_二本尊身_一名_二無上菩提_一也。⁴⁷⁾第五證_二本尊_一獲_二金剛堅固身_一者、謂亦是

所_レ言妙覺金剛解脫道位也。然隨_二行者各各因位所修門_一、而果位所現之本尊身更說_二顯義_一也。故菩提心義五（卷五、大正七五・五五四頁中）云、今然復_二三世諸佛各從_二一門_一入_二心本源_一故。從_二本所通門_一出_二法界海_一。一一諸尊皆以_二一切如來_一爲_レ體。又第一卷（卷一、大正七五・四七〇頁中）云、問。第五自身成_二本尊_一者、成_二何尊_一耶。答。各隨_二所尊_一成_二五部身_一。_文即是義也。問。付_二初義_一何故第四金剛身名爲_二佛果之解脫道_一耶。答。安公菩提心義第一云、以_二金剛身_一爲_二本尊身_一名_二無上菩提也_一。_云故順_二古德義_一故、今作_二此釋_一也。₄₆

やや表記が不明瞭なところもあるが、波線部の箇所を見れば、A説の概要は了解されるであろう。要するに、濟運は、①通達菩提心②十信、②修菩提心③三賢・十地、③成金剛心④等覺、④證金剛身⑤佛身圓滿⑥妙覺という四種の對應關係を想定していると考えられるのである。そして、その最大の典據こそが、安然の『菩提心義抄』卷一・卷四等に見られる五相成身觀に關する記述なのである。このことは、『五相成身義問答抄』の「實知菩提心義文、以_二五相_一別別如_レ次雖_レ不_レ配_二五位_一、而以_二五相_一即總攝四位義、此即有也。」₄₈という記述からも明らかである。ところが、實は『菩提心義抄』か

ら兩者の對比に關説する具體的な内容を抽出することはできない。したがって、A説は安然を参照しつつも、濟運の獨創に依るところが大きいものと言えるであろう。

このA説において特に留意すべきなのは、④證金剛身と⑤佛身圓滿の二相がどちらも妙覺であると捉えていることである。但し、濟運によれば、前者が自證（妙覺智）、後者が化他（成所作智・法界等流身）に屬すると一應辯別されている。ここで問題となるのは、④證金剛身と妙覺の對應關係である。濟運は、そのことを立論するために、『菩提心義抄』卷一の「以_二金剛身_一爲_二本尊身_一名_二無上菩提_一也。」という文を尊重しているが、安然の原意によれば、これは⑤佛身圓滿を説明する一文にしか過ぎない。このことから、この文を④證金剛身の説明にまで敷衍させる濟運の解釋は正鵠を得ていないようにも思われ、問題が残る。ともかく、様々な矛盾が含まれていることも忘れてはならない。

次に、圓仁を本據とする説（以下、B説）では、どのように評論されているのであろうか。先と同様に、『五相成身義問答抄』と『金剛頂發菩提心論私抄』の當該箇所を並記すれば、次のとおりである。

・『五相成身義問答抄』

故今以此和尚疏意、而勘會前安公菩提心義大意時、仁和尙意而以五相即如次應配五位意有也。仁和尙已云後一相是果。故決應知、依憑尊勝儀軌說、法界智爲究竟果義也。故當第四金剛身是等覺位也。既第四相是非配等覺者、可許第三金剛心是總可十聖位也。何以故。大儀軌明此第三相文『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』、大正一八・三〇二頁中云、……若許此義者、將可許第二菩提心相是即可當三賢。此觀相似位也。何以故。儀軌『蓮華部心念誦儀軌』、大正一八・三〇二頁中云、……又依之義、可許以第一相是可爲發信心位也。乃至以第五本尊身而可爲妙覺位也。⁽⁴⁹⁾

・『金剛頂發菩提心論私抄』

問。付後義、以何文證・理證、得知第一通達心攝性得菩提心及修得最初之發求菩提心、第二菩提心攝三賢位、第三金剛心攝十地位、第四金剛身攝等覺之金剛無間道、第五本尊攝妙覺地金剛解脫道耶。

答。第一通達心屬本有性得菩提心及修得最初之發求菩提心者、儀軌說五相成身中第一通達心『蓮華部心念誦儀軌』、大正一八・三〇二頁上中云、……儀軌說五相中第二菩提心『蓮華部心念誦儀軌』、大正一八・三〇二頁中

濟運における密教行位說（田戸）

云、……此文說眞言行菩薩之三賢行相也。此位菩薩所觀是相似觀而未實證觀也。問。此第二相是說三賢菩提心者、何此中可用發菩提心眞言耶。答。是指初發心住之成佛。何必云初發信心眞言耶。故華嚴等說初發心時便成正覺云。又第三金剛心說菩薩十地者、儀軌說第三金剛心文『蓮華部心念誦儀軌』、大正一八・三〇二頁中云、……第四金剛身攝菩薩等覺位之金剛無間道者、儀軌說第四金剛身文『蓮華部心念誦儀軌』、大正一八・三〇二頁中云、……又第五本尊屬佛果解脫者、軌

如『是文證、以五相配屬五位、於理無失。又於諸文而得便宜也。^{此後義}又教王經疏二云、此經正說文初演說五相眞言。初四是因位也。後一即果位也。^云』

このB說では、『五相成身義問答抄』で「仁和尙意而以五相即如次應配五位意有也。」と記す如く、『金剛頂經疏』の一文を基軸として、五相成身觀に十信・三賢・十地・等覺・妙覺の五十二位を順に配釋しようとしている。⁽⁵¹⁾しかも、文證として『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』の五相成身觀に關する箇所等が多用されているが、これは濟運獨自の視點から各觀法に充當させたものと推測され、『儀軌』そのものに五相成

身觀と行位の關係が明記されているという譯ではない。また、注目すべきなのは、『金剛頂發菩提心論私抄』の掉尾で「此後義好也。」と註記されていることであり、このことから、濟暹がA説よりもB説の解釋ほうが妥當性を有していると考えていたことも知られるのである。

ところで、先のA説が⑤佛身圓滿を妙覺と指定してないが、むしろ化他の面に力點を置いていたことは既に見たとおりであるが、B説ではあくまでも自證の面が重視されている。そのことは、『五相成身義問答抄』の「問。仁和尙依何文證、以第五相佛身圓滿。偏判爲果位耶。答。是方依菩提心論也。又無畏三藏尊勝軌云、次誦方便究竟智眞言。乃至云、此方便究竟智、或進修門中以方便爲究竟。即是後得智法身之義。⁵¹ 故可知、以此軌所云或進修門中以方便爲究竟之意、而仁和尙判第五相而爲妙覺極位歟。此中方便爲究竟、是自行之方便究竟義也。」という問答からも例證され、特に『尊勝佛頂脩瑜伽軌儀』卷上の「或進修門中以方便爲究竟⁵²」の文が、自證の面を強調する上で大きな役割を擔っていることが窺える。なお、上記のことに關連して、『金剛頂發菩提心論私抄』卷四には、A・B兩説の差異を解説しているところが見出されるので、續けて言及することにし

たい。

初義意通「自行・化他也。意云、於第四金剛身位自行滿故、既具足萬德圓滿菩提也。雖爾、以第五金剛堅固身爲本尊身之妙覺位。意爲利他出法界門、隨各各因位所奉本尊、而成本尊身、說顯而於末代之行者以此法而欲令軌則。其故、更說顯第五本尊身也。⁵³ 善提心。後義意、偏據自行圓滿義。以第五心爲實證解脫道佛果也。此約自行爲正成佛意也。第四金剛身尙屬因位也。⁵⁴

すなわち、A説では④證金剛身で自行を圓滿した後、更に⑤佛身圓滿において末代の行者を利益することが肝要であるのに對し、B説では④證金剛身ですら未だ因位であり、最後の⑤佛身圓滿で自行を圓滿させて成佛することが強調されるのである。ともあれ、兩説には、意を盡くしていないところも多く判然としない場合もあるが、その大略は把握されるであろう。以上のことを圖示すれば、次のようになる。

※A説く安然説に依據

① 通達菩提心ニ初發信位ニ十信

② 修菩提心ニ比觀修行位・分證得位ニ三賢・十地

③ 成金剛心ニ因滿位ニ等覺

④ 證金剛身・⑤ 佛身圓滿ニ果滿位ニ妙覺

※B説く圓仁説に依據

① 通達菩提心ニ初發信位ニ十信

② 修菩提心ニ比觀修行位ニ三賢

③ 成金剛心ニ分證得位ニ十地

④ 證金剛身ニ因滿位ニ等覺

⑤ 佛身圓滿ニ果滿位ニ妙覺

さて、それでは、これまで考察してきた濟運の教説が、後の東密の學匠にどのように受容されていたのか少しく概説してみたい。結論から先に言えば、實際のところ、あまり尊重されていないのが實狀のようである。管見の限り、賴瑜（一二二六〜一三〇四）の『眞俗雜記問答鈔』卷五（卷九）に、次の如き記述が見られるのみである。

濟運における密教行位説（田戸）

問。五相觀一位可有之乎。

答。濟運義云、五相長配瑜伽四地矣。朝譽義云、一一地皆有五相矣。私云、二義俱有。何是二隅矣。例如三因・根・究竟三心有長・短二義矣。

ここでは、五相成身觀と行位の關係について問答しているのであり、賴瑜は濟運と重譽（朝譽）⁽⁵⁶⁾の各説を取り上げて、そのどちらも是認している。この中、濟運の説をめぐり、五相成身觀が「瑜伽の四地」、すなわち、『仁王經儀軌』等で説く解行地（三十心）・普賢地（十地）・大普賢地（等覺）・普照曜地（妙覺）の四段階で漸次修得されるべきものとして理解されていることは、後世における受容の一端を知る上で貴重である。因みに、重譽（朝譽）に關しては、『祕宗教相鈔』卷六・「五相成身料簡第二十三」⁽⁵⁷⁾という項目の中で、ほぼ同様のことが詳論されていることから、賴瑜がそれを引據して、右の如く記したことは間違いない。なお、蛇足ながら、賴瑜について付言すれば、元杲（九一四〜九九五）の『金剛界念誦私記』に自身が註釋を施した『金界發惠抄』でも、諸先學の意見を引證しながら、やはり兩者の對比に強い興味を示している。それは、卷上に次の如く記されている。

問。五相以配地位方如何。

答。玄昭云、軌文「觀一切法如約如夢等^{乃者}究竟眞實智」、是爲「勝解行地」。^{地前}謂住妙觀察智印是也。次「空中諸如來^{乃至}如理諦觀察」是爲「普賢行願地」也。^{十地也}謂通達菩提心是也。觀「淨月輪」中有「金剛三摩耶身」是爲「大普賢地」。^{等覺}謂證金剛身是也。次「觀身爲本尊等」文、是爲「普遍照曜地」。^{佛地}謂佛身圓滿是也。^云慈覺金剛頂疏云、五相眞言。初四相是因行也。後一是果位也。^文眞興記云、自下明^下第十地住滿以後以^二五種相^一成^中正覺。言「五相」者、一通達菩薩心即勝進道。二修習菩提心即加行道。三成金剛心即無間道。四證金剛身即解脫道正體智。五佛身圓滿即後得一切種智。初三因攝第三劫滿、後二果攝第三劫後。^文私云、初三因攝者、通達心當第十地滿勝進道。次二相如^レ次當^レ等覺位加行・無間二道歟。故云初三因攝。是三俱在第三劫滿也。後二果攝者、第四・五相於佛果位如^レ次配^レ正體・後得二智也。俱是解脫道攝也。此二非第三劫攝故云第三劫後也。又以成菩提以前、配三賢・十地等也。所謂勝願・金剛眼・金掌・金縛、如^レ次信・住・行・向也。^{第一資}開心・入智・合智・普賢、如^レ次煥・頂・忍・世第一也。^{第二加}極喜至^二成菩薩^一十種、如^レ次十地也。^{初極喜}第三通達位。^{行位}降三世至^二成菩薩^一、第四（金剛心）修習位。證金剛

身・佛身圓滿。^{第五究}愚案云、大日經宗三句、既於「十地」論^レ之。金剛頂宗五相、何或通^レ地前、或局^二十地滿後^一。^{（58）}當^レ智、五相可^レ在^二十地位^一也。^{（59）}賴瑜は、本書の冒頭で濟運の『五相成身義問答抄』に觸れているが、積極的に活用している形跡は皆無に等しい。ここでも、玄昭（八四四・九一五）や圓仁、更には眞興（九三三・一〇〇四）の『梵囀曰羅駄觀私記』^{（61）}等の諸著作を援用しながらも、濟運に對する言及は一言も見られない。賴瑜が最も關心を拂っているのは、眞興の『私記』である。しかしながら、賴瑜の態度は批判的である。というのも、『私記』では、第十地（法雲地）が成滿して以後、五相成身觀を修得できると説くのであるが、賴瑜によれば、この觀法は初地以上において論ずべきものであるからである。ここでの賴瑜の見解は、偏に初地重視の姿勢の表れであると考えられる。そもそも、『私記』では、『蓮華部心念誦儀軌』の次第に唯識の行位（資糧位・加行位・通達位・修習位・究竟位）を充當させるという、濟運以上に獨特な解釋が展開されている。とはいえず、右の記述から明らかなように、賴瑜は、その内容を詳しく分析しているものであり、たとえ批判的であつたにせよ、強い關心を示していたことには注意する必要がある。^{（62）}

以上の如く、濟運は、五十二位の行位を應用して五相成身觀を解釋しているのであり、その教説に占める圓仁・安然の役割は極めて大きいものと言えよう。そうしたこともあつてか、後の東密では、あまり重視されることはないようである。また、その遠因として、覺超の『五相成身私記』のほうが内容的により充實したものであったために、濟運の著作は参照される程度に止まったのではないかということも推測される。いずれにせよ、東密における五相成身觀の變遷を辿る上で、濟運の教説がその嚆矢として貴重であることは間違いないからう。

四 行位の經歷について

上來、五相成身觀と行位の關連性という、やや特殊とも言うべき事項を中心に論じてきたが、本節では、この行位を如何にして經歷し成佛するかという基本的命題に焦點を絞り、少しく勘考していきたい。先ず、この問題を究明する上で、濟運の即身成佛思想を押さえておくことが不可欠である。⁽⁶³⁾ここでは、成佛する時點において分段身を捨てるか否かという重要な事柄も議論され、基本的に分段身の不捨が即身成佛の正意であると把握されている。但し、分段身を捨てる、或い

濟運における密教行位説（田戸）

は捨てないのいずれにせよ、その質的轉換がどの地位において生起するのかという踏み込んだ内容までには至っていない。

ともかく、濟運において、速やかに段階を経て成佛することが肝要だったようである。そのことは、次に示す『五相成身義問答抄』の問答に端的に記されている。

問。若爾者、何出生義云^三及乎大種姓人法緣已熟、三祕密教說時方至、遂却住^三自受用身、據^三色究竟天宮、入^三不空王三昧、普集^三諸聖賢、創^三地位之漸階、開^三等・妙之頓旨^{上云}。故知、眞言家無^三地位階降義^二也。

答。不^レ爾。但無^三漸次經^一歷位地^二云也。不^レ經^三三無數劫修行^二而速成佛故也。但不^レ謂^三一生・二生之間速疾不^レ經^一三賢・十地位^二也。故不^レ相違⁽⁶⁴⁾也。

ここでの問答は、『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』の、特に「創^三地位之漸階、開^三等・妙之頓旨^{上云}」という文を如何に位置づけるかということが發端となっている。この文によれば、段階的な行位を用いることなく、即座に等覺・妙覺に至るという解釋も可能である。しかしながら、濟運はこれを明確に否定して、一生、或いは二生の間、速やかに三賢・十地を昇るということに意義を見出すのである。つまり、ここでは、

密教の速疾成佛を前提としながら、行位の階梯は必ず踏まなければならぬことを主張しているのである。このことについては、『兩部曼荼羅對辨抄』卷下における、次の如き記述からも例證される。

問。密教頓證門中、何用漸次轉昇地位義耶。

答。此秘密頓教中即身成佛者、是約頓機根性與佛秘密加持妙術力故、而成精進勇猛修行敢不懈怠時、昇進諸地位速疾而經歷諸位云也。是速疾行者、是謂超越時節之長遠也。不謂全越行位次第也。故大疏一云、次第此生滿足。此中次第者、梵音有不住義・精進義・遍行義。謂初發心欲入菩薩位故。於此眞言法要方便修行得至初地。爾時以此無所住進心不息。爲滿第二地故。……如是次第、乃至滿足十地、唯以一行一道而成正覺。⁽⁶⁶⁾ 即是義意也。

すなわち、密教の即身成佛では、速やかに行位を経ることが樞要なのであり、時節の長遠を超越することこそが、その速疾たる所以なのである。更に、その論據として、『大日經』卷一の「十地次第此生滿足」に對する『大日經疏』卷一（『義釋』卷一）の註釋部分が引用されているが、これは「次第」という用語に段階的な概念が含意されていることに注目した

からに他ならない。なお、同じく『兩部曼荼羅對辨抄』卷下では、前出の『出生義』について、「一者、是文亦明眞言行菩薩超越長時可修習廣行功勞也。專不謂不經所應經歷之地位也。又解者、於是三密境界者、若是約實行人言之者、是修行眞言門直往菩薩正所應超入境界也。是不於修行於餘顯教而所得菩薩之十地等中所行境界云也。以此義故、言削顯教之所行之地位漸階也。不謂於眞言不經地位也。」と解説している。これによれば、眞言行の菩薩が長期にわたる修行を超越すること、或いは顯教において漸次に證得すべき行位の階梯を減削することが、『出生義』の本來説示するところなのであり、結果として、密教では必ず行位を経ることが要求されるのである。とはいえ、それが、あくまでも時間の短縮を寓したものであるということには留意すべきである。

さて、東密では、初地を基調とした行位説、すなわち初地即極という教義が喧傳されるようになるのであり、その大意については既に述べた如くである。そこで今、殘された問題として、濟暹がこの初地をどのように理解していたのか考察する必要がある。そのためには、先にも少しく觸れたが、『大日經義釋』卷二（『疏』卷二）の「然此經宗、從初地得即

入「金剛寶藏。」という一文に對する濟暹の見解を検討するところが適切であると思われる。そこで、一例を示すならば、『兩部曼荼羅對辨抄』卷下に次のような問答が見出される。

問。大疏第二末云、然此宗、從「初地」得、即入「金剛寶藏」云。是文意者、得「到」眞言門中初歡喜地位「已時」、且雖「未」經「歷」後地位、而眞實證「妙覺果地」之所證境界「云也。是義二何。

答。是不「謂」直超「昇如來地」義也。是金剛寶藏之名不「謂」必果地名號也。眞言門佛菩薩所證常住不壞極理名云「金剛寶藏」故、初地菩薩亦分證此理云也。所以知「爾者、六波羅蜜經超悟疏第三云、……故知、是文不「謂」眞言門菩薩超「過」自宗諸地位義也。故大疏二云、……焉知、不「過」超「行位」也。只速疾經「過」地位之「功行」意也。如「大疏第一卷所「明象乘・馬乘・神通乘喻」也。然雖「云」神通乘有「速疾用」而於「所經路」不「失」其里數」也。此亦爾。

濟暹は、初地で佛果を證得するという釋義が妥當であるか否かと問いに對して、その位では佛果を部分的に證得したに過ぎないと述べている。ここでの初地とは、『大日經住心品疏私記』卷一五で「是以眞言門初地菩薩」而簡「別於前顯教所說

濟暹における密教行位說（田戸）

初歡喜地菩薩」也。……謂彼華嚴經等所「明初歡喜等十地菩薩所「證眞如理境、是隨緣諸法之自性本不生之寂滅法性理是也。而是眞言門中初歡喜地菩薩等所證理者、是有「三種」也。前所「云諸法空理、竝法然三密境界理是也。」と記される如く、顯教の初地とは峻別されたものである。したがって、密教の初地で證得される境地が顯教のそれよりも甚深であることは自明のこととなっている。但し、その境地たる「金剛寶藏」は佛果そのものではなく、あくまでも所證の理なのである。そのことは、同じく『大日經住心品疏私記』卷一五の「是三密宗初地菩薩始修「入法然理性」名爲「入」金剛寶藏云也。」という一文からも例證される。要するに、濟暹は初地を密教の聖位として受け入れつつも、それが佛果と同等であるとまでは想定していなかったのである。この事實は、濟暹が初地即極說到に依據していないことを示唆している。また、それだからこそ、更に行位を経る必要があることを強調するのであり、しかも、先と同様、「速疾」であることが前提となっている。そして、そのことを、『大日經疏』卷一（「義釋」卷一）から神通乘の譬喩を引據して説明するのである。

このように、濟暹は行位の階梯を速やかに昇ることの意義を繰り返し主張するのであるが、實はこれが安然の教説をは

ばそのまま踏襲したものであるということを看過してはならない。すなわち、『菩提心義抄』卷四には、次のような記述がある。

問。出生義云、創_二地位之階漸_一開等・妙之頓旨。若爾、直爾可_レ住_二金剛定_一。何故更_レ云_二身證_一十地。

答。如_二天台云_一。圓頓止觀、頓圓頓足。譬如_二通者飛騰不_レ失里數_一。今眞言門頓入凡夫雖_二頓超_一而不_レ失_二地位階級_一。故亦名爲_二漸學大乘者_一。又大日經云、十地次第此生滿足。⁽⁷³⁾
但創_二歷劫之階漸_一、不_レ創_二超劫之階漸_一。

安然是、眞言門の頓入の凡夫が頓超することは當然であるとしても、それは行位の階梯を無視するものではなく、「超劫之階漸」を意味するものであると明言している。これは、前にも言及した『出生義』の一文に對する會釋から導き出されたものであり、その論理展開と結論が濟暹と共通性を有していることは一目瞭然である。また、『金剛頂經大瑜伽祕密心地法門義訣』に説かれる「漸學大乘者」⁽⁷⁴⁾や『大日經』卷一の「十地次第此生滿足」等と竝んで引證される圓頓止觀に關する譬喩的表現をめぐり、「不_レ失_二里數_一」⁽⁷⁵⁾という文が、先の『兩部曼荼羅對辨抄』卷下における神通乘の解釋にそのまま活用されていることも、兩者の關係を語る上で注目すべき事例であ

る。

以上の檢討から、濟暹が安然の敎説を繼承して行位の階梯を尊重していたことは了解されるであらう。また、濟暹が初地を分證の段階と位置づけていることも、この時點で初地即極説が未だ確立していなかったことを如實に示している。なお、問題となるのは、行位を経て最終的に到達すべき佛果（妙覺果）が第十地であるのか、それとも第十地の外にあるのか、そのいずれかの場合、等覺をどこに組み込むのか、解説が十全でないことである。例えば、『大日經住心品疏私記』卷一五では、「問。從_二初地得_一即入_二金剛寶藏_一故者、是從_二初地不_レ經_二餘九地_一而直至_二妙覺果_一云歟。答。不_レ爾。……是意云、從_レ得_二初地_一一生而無間次第滿足_二十地_一、而到_二金剛解脫道常住理_一云也。」⁽⁷⁶⁾と述べられ、佛果（妙覺果）を第十地の外に指定しているように見えるが、これでは等覺がどこに配當されるのか不明である。このように、教理面の整理が不徹底なところも、濟暹の特色の一つと言えるかもしれない。

五 結 語

本稿では、濟暹が行位についてしばしば言及している點に着目し、その一端を考察することで、初期の東密において圓

仁や安然等の教説が柔軟に受容されている様相を明らかにした。

濟暹の行位説は、五十二位を基軸としたものであり、この行位を様々なところに充當させている。その最たる例が、『五相成身義問答抄』を筆頭に諸著作で觸れる五相成身觀との對應關係である。濟暹は行因至果という觀點から、安然と圓仁の各記述を主軸にして五相成身觀と行位の關係に二説があることを提示しつつ、安然よりも圓仁に依據する解釋の方が妥當であると説いている。但し、このような濟暹の見解は、それ以降における東密の五相成身觀の展開において、ほぼ等閑視されているのである。僅かに、賴瑜が濟暹説に論及しているところが見られるが、自らの註釋には全く反映させていない。その因由として考えられるのは、濟暹説が台密の主張にあまりに準據しているために、あえて無視されたということである。加えて、覺超の『五相成身私記』が、濟暹の諸著作よりも五相成身觀について詳細に解説していることも、濟暹説が重視されなかった要因の一つと言えよう。

また、行位の経歴という問題においても、濟暹は安然の教説を繼承して行位の階梯を速やかに経る必要性を強調するのであり、特に密教の聖位である初地以上においても同様のこ

濟暹における密教行位説（田戸）

とを論じている。このことから、濟暹が後に確立するような初地即極説を想定していなかったことが知られるのである。濟暹の段階は、東密教學が未だ定型化される以前であり、議論が成熟していない部分も見出される。とはいえ、台密も視野に入れつつ、自らの方向性を示したことが東密教學の基礎になったことは疑いなく、そうした點を再評價しその意義を認めるべきであると考えられる。

(1) 大久保良峻『台密教學の研究』第八章「台東兩密における行位論の交渉」(法藏館、二〇〇四) 参照。

(2) この點については、拙稿「濟暹の教主義について——安然説の受容——」『早稻田大學大学院文學研究科紀要』四八、二〇〇三)、同「濟暹における『蓮華三昧經』(『本覺讀』)の引用について」『豐山教學大會紀要』三三、二〇〇四)等で僅かながら考察した。

(3) 續天全、密教Ⅰ・六九頁下〜七〇頁上。大正三九・六〇五頁上。

(4) 大正一八・三三一頁中。

(5) 真全二〇・一九〇頁上下。

(6) 真全九・二四頁下。

(7) なお、二地以上の位をどう把握するかをめぐっては、『宗義

『決擇集』卷七（眞全一九・一五〇頁上）に「先就道理、初地圓極自證、二地以上建立有何所用耶者、古來會有三義。

一云、立二地以上次位者、則順常途。理實初地外無有證位。二云、二地以上約化他門。三云、開初地所證德、以立三二地以上位也。」と記されていることから、化他の位と位置づける以外にも諸説あったことが知られる。

(8) 眞全二〇・一八八頁上。近似する内容は、引融の『古筆拾集抄』卷六（眞全一八・四二二頁下）や『宗義決擇集』卷七（眞全一九・一五三頁上）等にも見出せる。機根論については、高井觀海『眞言教理の研究』所收「發心即到」（法藏館、一九八六）、『密教大辭典』の「機根」の項等、参照。

(9) 道範の生年及び没年には諸説が存在する。本稿では、『行法肝要抄』卷下・奥書（眞全三三・一七七頁下～一七八頁上）の記載に則り、生年を治承二年（一一七八）、没年は通説どおり建長四年（一二五二）とする。

(10) 續眞全一八・二九三頁下。

(11) 東密では、十地と十六生（十六大菩薩生）の關係を「生地開合」や「十地十六生」等の算題で議論している。例えば、『宗義決擇集』卷一一（眞全一九・二五六頁上～二六三頁下）・『大疏百條第三重』卷十（大正七九・七四七頁下～七四九頁下）等、参照。なお、十六生については、福田亮成『理趣經の研究とその成立』第四章、第三節『理趣經』の成佛論―特に十六大菩薩生をめぐって―・第四節『眞言密教における

十六生成佛論』（國書刊行會、一九八七）に論及がある。

(12) 十地をめぐっては、顯教とは辯別される密教の十地が説かれることが多い。一例を示せば、『果寶私抄』卷十所收「密教所立十地在顯教果上歟事」（眞全二〇・一四一頁上～一四四頁下）において、密教の十地を①五佛位、②菩薩位、③凡夫位に分け、これら三種の十地が顯教の佛果よりも上にあると述べられている。

(13) 大正六〇・三一〇頁上。

(14) また、果寶（一三〇六～一三六二）の『傳寶記』卷二所收「今宗於地前立位歟事」（大正大學藏版本・一二丁左～一四丁右）では、「如_レ此內證・外用相望建立地位中、有開合不同。故或初發心直住初地說之、或修_レ行地前、而後入_レ十地說之。是即內證惣攝_レ十地、外用爲_レ地前。故有何位、此處爲_レ內證、即是初地已上也。自_レ其已前爲_レ地前。地前即心外隨緣位、與顯教齊等也。地上心內法爾位、眞言不共也。」とあり、初地以上が眞言不共の心内・內證の位であると説かれている。但し、果寶の眞意は、「如_レ此自宗地位、不依位、不依斷惑。只住法體不住不同以爲_レ內證・外用也。」と記される如く、法體に住するか否かの相違によって內證と外用を辯別するのであり、本來は行位の差別に依據しないところにある。

(15) 大正一八・一頁中。なお、東密では、この文を基點として「十地佛果」・「佛果開合」等の算題を建立し、十地に佛果を攝

めるか否か議論している。詳細は、『宗義決擇集』卷七(真全一九・一五七頁上)・二六二頁下)・『大疏百條第三重』卷四(大正七九・六四五頁下)・六四六頁下)等、参照。

- (16) 大正七八・一〇七頁上中。なお、この問答は、海惠の『密宗要決鈔』卷三(真全一七・八三頁下)・八四頁下)に「秘宗心立三十二位事」という項目の下、ほぼ全文が援引されている。

- (17) 大正圖像一・二三七頁中下。

- (18) 大正一九・五一八頁下。

- (19) 大正三三・五一八頁下。

- (20) 大正一八・九四五頁中。濟運は「金剛智三藏用心次第義云」と記しているが、正確には『無畏三藏禪要』の文である。このことに關連して、『五相成身義問答抄』(大正七八・一〇五頁上)では「用心次第者、私云、金剛智三藏所述諸部結護法之異名歟。」と述べられ、濟運自身がこの文獻を熟知していなかった様子が窺われる。なお、ここでは、解脱一切障三昧が地前の三賢で獲得できると記されているが、後の東密において、この三昧を初地に配當すべく議論が展開され、この文をどう會通するか大きな課題となっている。因みに、濟運は、『大日經住心品疏私記』卷七(大正五八・七四一頁下)で「今云、是明十住中初發心住行也。」と論評し、初住に該當させている。これらの問題については、大久保前掲書・第七章「台密の行位論」に論及がある。

濟運における密教行位説(田戸)

- (21) 大正二〇・五九八頁下。大正二〇・五九八頁上。

- (22) 續大全、密教一・二三七頁上。大正三九・六七二頁下)・六七二頁上。ここに說かれる四十二位に着目して、初住を基準とした密教の行位説を構築したのが安然である。大久保良峻

「安然の行位論」(『印佛研』三三一、一九八四) 参照。

- (23) 大正七〇・一九頁下)・二〇頁上。

- (24) 大正三二・五七四頁中。

- (25) 大正七五・四七七頁上。

- (26) 『五相成身義問答抄』(大正七八・一〇七頁中)でも、良貴の『仁王經疏』や『慈氏儀軌』等、同様の典據を引用しつつ、「私云、此等文皆明眞言家五十位地有義也。」と記されている。

- (27) 大正五八・八〇三頁下)・八〇四頁上。ここでは、「若依三十七尊心要意者、最初金剛薩埵是當初發信心及十住位也。王菩薩是當十行位。愛菩薩當十迴向位。喜菩薩當初歡喜地。寶菩薩是當離垢地。光是當發光地。幢是當焰惠地。笑是當難勝地。法菩薩是當現前地。利菩薩及因菩薩二種人是遠行地。語菩薩是當不動地。業菩薩是當善惠地。護菩薩是當法雲地。牙是當等覺位。拳菩薩是當妙覺位也。是約行因至果義也。若約從本垂迹義、一一菩薩皆悉攝得諸位功德也。具如別抄釋也。」と述べられ、『金剛頂瑜伽略述三十七尊心要』(大正一八・二九二頁中)の記述に準據して、十六大菩薩と五十二位の關係が論じられている。なお、

海惠の『密宗要訣抄』卷四所收・「十六大菩薩配」釋三賢・十地・佛果事（眞全一七・九八頁上～一〇二頁上）という項目にも、濟運撰として『十六大菩薩問答抄』が援引され、同様の解釋が詳説されている。この『十六大菩薩問答抄』は現存しないようであるが、海惠が引用する箇所は、先の『大日經住心品疏私記』における「別抄釋」に相當することが推測される。

- (28) 坂野榮範『金剛頂經に關する研究』第四章、第一節「五相成身觀の體系的研究」特に經軌の上に於けるその成立的考察——（國書刊行會、一九七六）參照。

- (29) 大正一八・二八四頁下。

- (30) 大正三二・五七四頁中。

- (31) 濟運は、覺超の『五相成身私記』を閱覽していたようである。そのことは、濟運の『金剛界大儀軌肝心祕訣抄』卷中（眞全二四・三〇頁下）に「覺僧都記」として『私記』（大正七五・七八九頁上）の取意文が引用されていることから確認され、眞言宗全書解題でも同様の指摘がなされている。但し、『五相成身義問答抄』（大正七八・一一二頁中）には、同じく覺超の『金剛三密抄』卷二（大正七五・六七頁下）からの引用が見られるが、『私記』からの影響は殆ど窺えない。

- (32) 眞全二四・三五頁下～三六頁上。同様の内容は、『兩部曼荼羅對辨抄』卷上（大正圖像一・二二九頁下～二三〇頁上）にも見出される。また、『金剛頂發菩提心論私抄』卷四（大正七

〇・二二頁中）では、「今私案云、此五相有二義。一者唯有佛果義。如安公所引指歸及祕藏寶鑰說。二者通因果二位。明五相成身。如此論及教王經・金剛界大儀軌等。」と記されている。

- (33) 定弘全三・一六七頁。

- (34) 大正七五・五二八頁上中。

- (35) 大正一九・三七二頁中～三七二頁上。

- (36) 詳細については、密教研究會・平成一六年度學術大會（於高野山大學）にて「日本密教初期における五相成身觀の展開」という題目で發表を行った。後日、別稿を記す豫定である。

- (37) 大正六一・一二頁上。原文では、「是故、此經正說文初演」說五相眞言。初四是因位也。後一卽果位也。」となっている。

- (38) 大正七八・一〇四頁下。

- (39) 大正七八・一〇四頁下。

- (40) 卷四、大正七〇・二二頁下。

- (41) 大正七八・一〇四頁下～一〇五頁上。

- (42) 卷四、大正七〇・二二頁下。

- (43) 大正七八・一〇五頁上。

- (44) 卷四、大正七〇・二二頁下。

- (45) 大正七八・一〇五頁上。

- (46) 卷四、大正七〇・二二頁下～二三頁上。

- (47) 『兩部曼荼羅對辨抄』卷上（大正圖像一・二三〇頁上）では、「又依安然釋者、前三心是因位、次第四・第五相者、是

爲「佛果位」也。」と述べた後、同様に安然の諸文が援引されている。

(48) 大正七八・一〇五頁中。

(49) 大正七八・一〇五頁下〜一〇六頁上。

(50) 卷四、大正七〇・二三頁中〜二三頁上。

(51) 『兩部曼荼羅對辨抄』卷上（大正圖像一・二三〇頁上）では、「第一通達心攝」性得本覺菩提心及修得初發信心位也。第二菩提心則攝三賢位也。第三金剛心則攝菩薩歡喜等十地位也。第四金剛身則攝等覺地圓行也。第五證本尊身位攝妙覺地極果位也。」と述べられている。

(52) 大正七八・一〇五頁中。

(53) 大正一九・三七一頁下。

(54) 大正七〇・二三頁上。

(55) 眞全三七・一〇二頁下〜一〇三頁上。眞言宗全書では卷五に配當されているが、卷頭には卷九と表記されている。なお、賴瑜の『菩提心論初心鈔』卷下（新版日藏・眞言密教論章疏五・一二八頁下）にも、「或以此五相配瑜伽四地也。或五相始終、自宗入地以去行相也。於入地已去者、更不可有漸・頓不同。但橫初地具之。豎十地之開備之也。故知、前後次第約「德相之不同」、同時具足據「頓成之時分也。」とあり、濟運の名は明記されていないが、同様の内容が説示されている。

(56) 生没年は未詳であるが、『祕宗教相鈔』卷十・奥書（大正七濟運における密教行位説（田戸）

七・六四七頁下）には、保延五年（一一三九）の年記があり、また『十住心論鈔』卷下・奥書（大正七七・六七三頁中）にも、保延六年（一一四〇）に校了した旨が記されていることから、この頃、精力的に著述活動を行ったことが推測される。

(57) 大正七七・六一四頁下。

(58) 大正七九・一一六頁中下。

(59) 卷上、大正七九・九八頁中。ここでは、『五相成身義問答抄』（大正七八・一一〇頁上）の取意文が援引されている。

(60) 『山家祖德撰述篇目集』（『龍堂錄』）卷下（佛全二・二七二頁下）には、玄昭撰として『金剛界私記』という著作名が見出されるが、現存しないようである。

(61) 大正六一・五九四頁中。なお、濟運は『辨顯密二教論懸鏡抄』卷五（大正七七・四六六頁下）で、眞興の『唯識義私記』卷六本（大正七一・三九四頁下）の一部を引用している。また、『大日經住心品疏私記』卷七（大正五八・七四〇頁上）にも、「眞興僧都云」として『唯識義私記』卷二本（大正七一・三三三頁中）の文が引用され、同書卷九（大正五八・七五三頁下〜七五四頁上）・卷一六（大正五八・八二六頁下）等でも、「眞興僧都云」や「眞興僧都大般若音義第一云」という記述が見出される。但し、『梵囀曰羅駄靚私記』を閲覽していた様子は窺えない。

(62) なお、有快も『即身成佛義鈔』卷二（眞全一三・一九九頁下〜二〇〇頁上）で、④證金剛身を自證とする「一義」の根

據として、『梵疇曰羅駄觀私記』の同文を援引している。

- (63) このことを論じたものとして、堀内規之「濟遲の即身成佛思想について」(『印佛研』四九―一、二〇〇―一)がある。

- (64) 大正七八・一〇七頁上。

- (65) 大正一八・二九七頁下。

- (66) 大正圖像一・二三七頁下―二三八頁上。

- (67) 續天全、密教一・一五頁下―一六頁上。大正三九・五八四頁上中。

- (68) 大正圖像一・二三八頁上。

- (69) 大正圖像一・二三八頁上中。

- (70) 大正五八・八〇二頁下。

- (71) 大正五八・八〇三頁上。

- (72) 續天全、密教一・四頁上。大正三九・五七九頁下。

- (73) 大正七五・五二四頁上。同様の内容は、『教時問答』卷一(大正七五・三九三頁中)にも説示されている。これらの記述については、大久保前掲書・第四章「神通乘について」で詳しく分析されている。

- (74) 大正三九・八二三頁上。

- (75) 『摩訶止觀』卷一上の序分(大正四六・一頁下)には、「圓頓初後不二、如通者騰空」とあり、圓頓止觀が初後不二であることを通者の騰空に喩えている。但し、速疾の意味は含まれていない。

- (76) 大正五八・八〇三頁上中。